三重県埋蔵文化財調査報告２０８－３

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

発シ（おこし）A遺跡

２００２．３

三重県埋蔵文化財センター

序

県下有数の大河である宮川の流域には、古くは旧石器時代から連綿とした人間の営みがありました。それらは、大地に刻まれた地域固有の歴史遺産としてかけがえのないものであることは言うまでもありません。さらに、これら埋蔵文化財は地中に埋もれており、平素、我々が直接目にすることはできません。それゆえに、一般文化財とは異なる慎重な調査と保護の必要性があると言えましょう。

一方、宮川を水源とする宮川用水は、古来農地が高位にあるため、宮川を間近に控えながら、その水を灌漑用水として十分に利用できず、天水や溜め池などに頼っていた地域を潤してきましたが、完成から30年の年月が経過し、農業を取り巻く環境の変化による用水不足や、施設の老朽化により、地域の営農活動に深刻な影響がでてきております。これを受け、宮川用水第二期土地改良事業が行われることになりました。

宮川用水第二期土地改良事業地内には、多数の埋蔵文化財が遺存していることが確認されています。これらは、一度破壊されてしまうと二度と復元できません。しかし、その一方で、用水路の改修も急務となっており、三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と用水路の改修との調和を図るため、農林水産省等関係機関と協議を重ねてきました。その結果、工法や設計の変更等により極力遺跡の保存を行い、やむを得ず工事によって保存できないものについては、当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、記録として保存することになりました。

今回報告するのは、多気郡明和町に所在する発シ（おこし）A遺跡の発掘調査記録であります。本書が、消滅した遺跡にかわって、郷土の歴史・文化を未来に伝える一助となれば幸いと存じます。

なお、末筆ながら、発掘調査事業の推進にあたり、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所並びに、社団法人中部建設協会、明和町教育委員会をはじめとする関係機関各位及び、地元の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

平成14年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　桂　川　　哲

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が農林水産省東海農政局から委託を受けて実施した、国営宮川用水第二期土地改良事業地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成12年度に現地調査を行い、平成13年度に整理・報告書作成業務を実施した、発(おこし)シＡ遺跡の発掘調査報告書である。

2．現地調査及び整理・報告書作成にかかる費用は、農林水産省東海農政局の全額負担による。

3．本書に使用した事業計画図及び地形図は、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所の提供による。その他建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

4．本書の執筆・編集は、小山憲一が行った。また、本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物図面の作成は、調査担当者のほか、業務補助員が行った。

5．本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は、すべて座標北で示している。なお、当地域の磁北は、６度20分西偏する。（平成３年現在）

6．本書で報告した各遺跡の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

7．本書では、土層及び遺物の色調について小山・竹原編『新版標準土色帖』（９版1989）を使用した。

8．本書で使用した遺構表示略記号は下記による。
　ＳＥ：井戸　　ＳＲ：自然流路

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ．前　　言 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．遺　　構 …… 6
Ⅳ．遺　　物 …… 11
Ⅴ．結　　語 …… 21

挿図目次

Ⅰ．前　　言
第１図　調査区周辺事業計画路線図 …… 2
Ⅱ．位置と環境
第２図　遺跡位置図 …… 4
Ⅲ．遺　　構
第３図　遺跡地形図 …… 6
第４図　調査区位置図 …… 7
第５図　遺構平面図 …… 8
第６図　土層断面図 …… 8
第７図　ＳＥ１実測図 …… 9
第８図　ＳＲ２遺物出土状況図 …… 10
Ⅳ．遺　　物
第９図　ＳＥ１出土遺物実測図 …… 11
第10図　ＳＲ２出土遺物実測図 …… 12
第11図　ＳＲ２出土遺物実測図 …… 13
第12図　ＳＲ２出土遺物実測図 …… 14
第13図　包含層他出土遺物実測図 …… 15

表　目　次

第１表　出土遺物観察表 …… 16
第２表　出土遺物観察表 …… 17
第３表　出土遺物観察表 …… 18
第４表　出土遺物観察表 …… 19
第５表　出土遺物観察表 …… 20

写真目次

遺跡遠景 …… 22
調査前風景 …… 22
調査風景 …… 23
ＳＲ２掘削作業風景 …… 23
ＳＲ２遺物出土状況 …… 24
ＳＲ２遺物出土状況近景 …… 24
ＳＲ２遺物出土状況近景 …… 25
ＳＥ１ …… 25
調査区全景 …… 26
出土遺物 …… 27

Ⅰ．前　　言

１．調査に至る経緯

当事業の全体についての調査に至る経緯や保護協議、調査体制等については、既刊の「発掘調査報告Ⅰ[①]」に詳述しているため、ここでは省略する。詳細については前掲書を参照されたい。また、当事業に伴う平成12年度の調査全般の概要については、既刊の「発掘調査概報Ⅱ[②]」を参照されたい。

今回、調査対象となった発シＡ遺跡は、１号幹線水路沿線に位置する。幹線水路の改修については、基本的に既設の水路下に用水管を埋設する計画となっており、これまでの事業所側との協議から、幹線水路に接する遺跡については、事前の範囲確認調査で本調査が必要となった場合、その範囲は工法或いは設計の変更で対応し、極力遺跡の保存に努めることで合意している。しかし、今回調査区となった範囲は、既設範囲を外れた新設部分であったため、事前の範囲確認調査で本調査が必要となった場合、当該範囲が同年度に施工されることから、直ちに本調査を実施することで合意していた部分であった。

範囲確認調査は、平成12（2000）年８月29日～９月１日に行った。調査の結果、遺構は検出されなかったものの、分厚く堆積した黒色粘土と灰白砂の互層中から、飛鳥～奈良時代を中心とした土師器等が多数出土した。そのため、調査区は旧河道、或いは旧沼沢地であり、その埋土中には遺物が相当量包含している可能性が高いと判断し、遺物採取を主たる目的とした本調査を、９月末から１ヶ月間で実施することとなった。

２．調査の経過

（１）調査経過の概要

現地調査の実施にあたり、事前に事業所側と現地協議を行い、当該工区の現場担当者に掘削範囲の明示を求め、調査区を確定した。一部対象範囲が幅２ｍ程度となる部分があり、範囲確認調査の結果から、掘削深度が２ｍ程度となることが予想されたため、安全性を優先し、当該範囲の調査は断念した。事業地が狭小であり、周囲がほぼ民有地で、東側に県道が走る中、排土置き場や作業員の休憩所、駐車スペース等の確保に苦慮したが、排土置き場は調査区東側の民有地を借地し、その他は、調査区南側の農道を利用してそれにあてた。

現地調査は平成12年９月28日に開始した。当初は順調に調査が進行したが、調査地が自然流路であったことから湧水が激しく、粘性の強い粘土が厚く堆積しており、掘削作業は困難を極めた。また、狭小な作業スペースや軟弱な地盤により、排土の管理や調査区に近接する排水溝の保全等、対応に苦慮することもあったが、中部建設協会のご尽力により、10月末の引き渡し期限目前の同年10月27日に現地調査の全工程を完了した。

（２）調査日誌（抄）

９月28日　重機による掘削を開始。
９月29日　重機掘削完了。
10月２日　地区杭設定。準備工（中部建設協会）。
10月３日　準備工（中部建設協会）。
10月４日　人力掘削開始。包含層掘削。
10月５日　調査区西壁土層断面図実測完了。
10月10日　調査区北壁土層断面図実測完了。
10月11日　自然流路（ＳＲ２）の落込みラインを検出。
10月12日　調査区西側のＳＲ２埋土上面に土器集中。出土状況写真撮影・図作成。
10月16日　ＳＲ２の掘削開始。激しい湧水。埋土下半からの遺物出土はほぼ皆無。
10月18日　２Ｃ地区で円形土坑検出・掘削。遺物少量。井戸（ＳＥ１）と認定。
10月19日　ＳＥ１実測。ＳＲ２埋土下半の掘削に重機導入。
10月24日　前日までの豪雨により、調査区北壁の一部崩落。復旧作業実施。ＳＲ２完掘。
10月26日　清掃及び調査区全景・遺構写真撮影。遺構実測。
10月27日　遺構実測完了。調査終了・現場撤収。

3．調査の方法

(1)地区設定について

東西に長い調査区であるため、方位に添うように4m方眼の地区杭を設置した。但し、この小地区方眼は任意による設定のため、国土座標軸とは合致していない。地区杭には、北～南に数字、西～東にアルファベットを付与し、各地区の北西杭を当該地区名とした。

(2)掘削の方法

掘削は、表土及び包含層直上の堆積層を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。また、SR2の掘削については前述のとおり、出土遺物が皆無となった埋土下半を重機で行った。

(3)遺構図面の作成について

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下のとおりである。

・平面図（全図）…1：100
・平面図／断面図（個別）…1：20
・土層断面図…1：20
・出土状況図…1：10

(4)遺構写真について

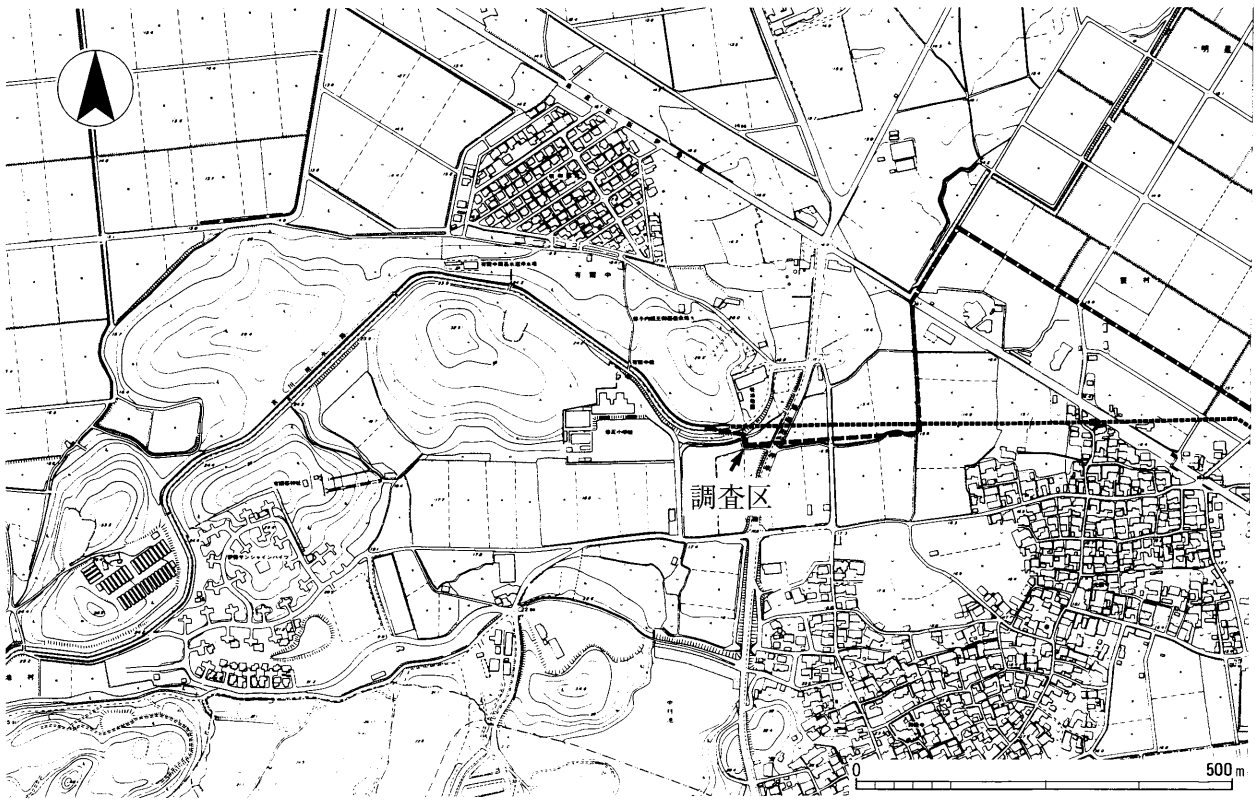
調査区全景及び個別の遺構撮影は、ローリングタワーを設置し、6×7㎝版（モノクロ、カラーポジ）に加え、35㎜版（モノクロ、カラーポジ、カラーネガ）を使用した。使用したカメラは、アサヒペンタックス6×7、ニコンFM2である。

4．平成12年度調査体制

所長　藤澤　英三
副参事　山澤　義貴
主幹兼調査第二課長　吉水　康夫
主幹　新田　洋
主査兼第二係長　森川　常厚
主事　小山　憲一
臨時技術補助員　瀬野　弥知世（5～8月）
業務補助員　北川　ゆき
中村　敬子
廣田　洋子
山路　艶子
中島　沙恵（9月～）

〔註〕

①小山憲一『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　外山遺跡・片落C遺跡』三重県埋蔵文化財センター　2000年
②小山憲一、瀬野弥知世『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター　2001年



第1図　調査区周辺事業計画路線図（1：10,000）（……既設路線　-----新設路線）

Ⅱ．位置と環境

１．位置

発シＡ遺跡（１）は、玉城丘陵北端の丘陵支脈東側縁辺部に立地する。丘陵北東部には明野台地が、北部・西部には櫛田川及び、かつては櫛田川の本流であったとされる支流の祓川の沖積作用によって形成された沖積平野が広がる。行政上の所在地は、多気郡明和町有爾中である。

２．環境

当遺跡が立地する玉城丘陵は、明和町、同郡多気町、度会郡玉城町の三町にまたがり、高見山地より多気丘陵、さらに当玉城丘陵と減高し、明野台地を隔てて伊勢湾に達する丘陵としての末端部で、標高30～100m程度の比較的起伏の小さい丘陵である。全般に小さい谷が樹枝状に入り組み、地形を利用した大小の溜池が多数所在する。また、当丘陵の縁辺部は、台地若しくは段丘となり、現在、生活の場として多くの集落が形成されている。

玉城丘陵の周辺地域は、埋蔵文化財が高密度に分布する地域として知られる。当地域の人々の営為の跡は、特に列挙はしないが、旧石器時代にまで溯ることができ、以降の各時代の遺跡も多数確認されていることから、人々が絶え間なく生活の場としてこの地域を利用してきたことが窺える。さらに、伊勢神宮や斎宮の成立以後は、この地域が南伊勢地方の政治・経済・文化の一翼を担ったと考えられる。斎宮については、天武天皇二年（673年）に大来皇女が卜定されて[①]から制度的に確立したと考えられているのが一般的であるが、それ以前のいわゆる伝承上の斎王の時代の様相は不明である。ただし、当該期のこの地域の特筆すべきこととして、斎宮周辺の丘陵上や台地上に無数に分布する、中期から後期にかけての古墳群の存在が挙げられる。今のところ、この地域の古墳の初現は、５世紀前半の方墳である権現山２号墳（２）とみられ、その後、５世紀後半にかけて高塚１号墳（３）、大塚１号墳（４）、神前山１号墳（５）といった造り出し付き大型円墳が順次玉城丘陵上に築かれる。後期初頭には、同丘陵内に中山６号墳（６）、斎宮池12号墳（７）、ユブミ２号墳（８）等の前方後円墳が築造される。この時期からは、大仏山丘陵や国束山北麓、玉城平地においても大仏山10号墳（９）や野田古墳（10）、かも塚古墳（11）、稲生１号墳（12）、宮西古墳（13）等の首長墓相当の古墳が造営されるようになる。このような中期～後期の大型墳の分布状況は、県内屈指である。

後期群集墳の分布状況をみても、玉城丘陵を中心に多数の古墳が築造される。丘陵北部には、垣場古墳群（14）、発シ古墳群（15）、世古古墳群（16）、天王山古墳群（17）、神前山古墳群（５）、大塚古墳群（４）、河田古墳群（18）等が、中央部には、斎宮池古墳群（７）、上村池古墳群（19）、ユブミ古墳群（８）、中山古墳群（６）等が、丘陵南部には、朝久田古墳群（20）、辻ノ長古墳群（21）等がそれぞれ造営される。このように、総数528基にのぼる密集ぶりは、南勢地方最大である。また、玉城丘陵以外にも、明野台地や大仏山丘陵等にそれぞれ塚山古墳群（22）や坂本古墳群（23）、大仏山古墳群（９）等も分布しており、これほどまでに古墳が密集する地域は、県下では他に類を見ない。この特異な状況が、斎宮を形成する基盤となったと考えられる。

斎宮制度確立前後のこの地域には、さらに特筆すべき点がある。それは、土師器の一大生産地帯としての側面であり、発シＡ遺跡の所在地周辺では、飛鳥時代以降、画一的で集約的な土師器生産が開始される。その様相を示すのが土師器焼成坑の存在であり、この地域での検出数が400基を越えるという事実がそれを如実に物語る。今のところ、この地域で前述のような生産が開始されたのが、６世紀中葉の北野遺跡（24）とされる。以後、８世紀にかけて堀田遺跡（25）、戸峯遺跡（26）、水池土器製作遺跡（27）、カリコ遺跡（28）、発シＡ遺跡、発シＢ遺跡（29）等で生産された。

これらの遺跡の所在地域は、かつて「有爾郷」と呼ばれた地域に属し、古来より伊勢神宮への調進土器を生産していた地域として知られる。「有爾郷」

第２図　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院「松阪」「明野」「国束山」「伊勢」1：25,000 から）

の存在と当地での土器生産は、平安時代初頭には文献で確認されている[②]。当郷の所属する多気郡は、度会郡とともに遅くとも７世紀には伊勢神宮の神領となっていた[③]。伊勢神宮の庶務一般を管掌する官司である神庤が、７世紀の中頃に有爾鳥墓村に設置されたという記録[④]も文献で確認されており、この神庤は、明和町蓑村所在の鳥墓神社周辺に推定され、鳥墓遺跡（30）として遺跡指定されている。また、同所には現在、神宮御料土器調製所が存在し、調進土器を貢納している。さらに、蓑村周辺は神代の昔、高天が原から埴土を移した伝承地ともなっており、『倭姫命世紀』に「天神之訓。土師之物忌乎定置。取宇仁之波邇。造天平瓮。八十枚天[⑤]。」とあるように、古代より埴土の採取が行われていたことが窺える。

このような事実から、６世紀中葉以降、大量に生産された土師器の消費地として考えられているのが伊勢神宮及び斎宮である。さらに、近年の研究から、交易によって尾張や美濃などの遠隔地にも供給されていた可能性も指摘されている[⑥]。また、当地での土師器生産には、その成立当初から伊勢神宮が深く関与し、前述の神庤が神宮から離れたこの地に置かれたのは、土器の生産地としての有爾の地を重視していたのではないかという指摘もなされている[⑦]。

この地域では、土師器焼成坑という、地上に痕跡を残す形での土師器焼成を示す事例は、今のところ６世紀中葉～８世紀までに限定されている。しかし、９世紀以降、明確な土師器生産を示す考古学的資料は乏しいものの、文献史学を中心とした小林氏の検証により、「有爾郷」の地が古代以来中世～近世においても、神宮への土器調進を行っていたことが明らかにされている[⑧]。また、中世以降は、伊勢神宮への「奉仕」的生産から商品土器の生産へと発展し、いわゆる「南伊勢系土師器」の中心的生産地として土器生産が続けられたと考えられている[⑨]。そして、その伝統は現在もなお受け継がれ、「有爾郷」の人々は、神宮への調進土器を作り続けているのである。

〔註〕

①『日本書紀』『新訂増補國史大系』第一巻下

②『和名類聚抄』京都大学文学部　臨川書店　1968年
『止由気宮儀式帳』『群書類従』一輯神祇部
『皇太神宮儀式帳』『群書類従』一輯神祇部

③『皇太神宮儀式帳』『群書類従』一輯神祇部
『日本書紀』『新訂増補國史大系』第一巻下

④『皇太神宮儀式帳』『群書類従』一輯神祇部

⑤『倭姫命世紀』『續群書類従』巻第三　第一輯上　神祇部

⑥城ヶ谷和広「東海地方における古代の土器生産と流通（予察）」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編　真陽社　1996年

⑦竹田憲治「土師器制作集団と伊勢神宮」『研究紀要』第７号　三重県埋蔵文化財センター　1998年

⑧小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態－伊勢国有尓郷を素材として－」『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター　1992年

⑨伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター　1992年
小林秀「外山遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第一分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1990年
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1　三重歴史文化研究会　1990年

Ⅲ．遺　　構

１．地形と基本層序

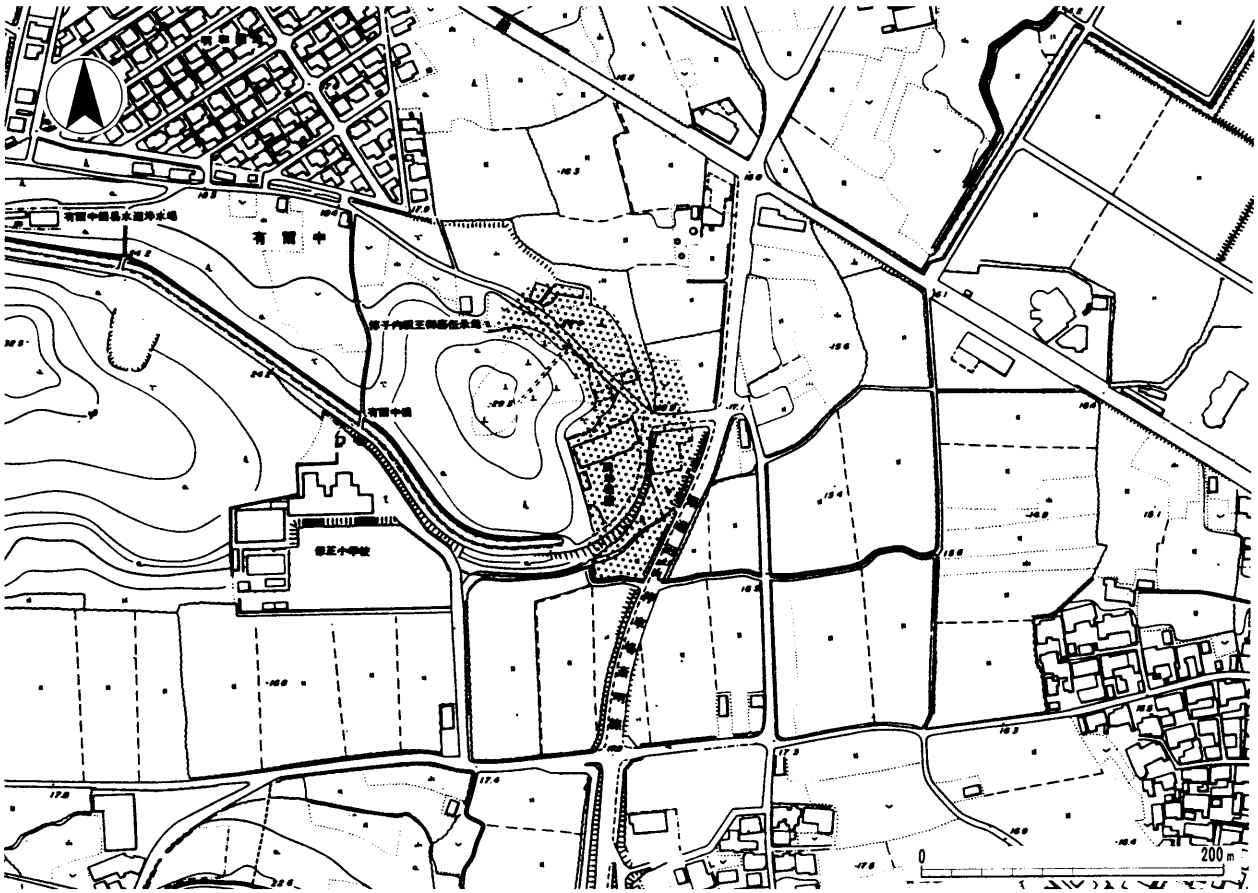
本遺跡は、玉城丘陵北端の東西に延びる丘陵支脈の東側縁辺部に立地する。調査区の現況は畑地である。事前の範囲確認調査では、遺構は検出されなかったものの、分厚く堆積した黒色粘土と灰白砂の互層中から、飛鳥～奈良時代を中心とした土師器等が多数出土した。そのため、調査区は旧河道、或いは旧沼沢地であり、その埋土中には遺物が相当量包含している可能性が高いと判断し、遺物採取を主たる目的とした本調査を第４図の範囲（約250m²）で行った。

層序は、耕作土下に褐色系の粘質土層が２層安定して堆積しているものの、その下層からは土層が乱れ、粘質土層や砂質土層、礫混土層が入り組んで堆積している。黄褐色粘質土の検出面には、現地表面から１ｍ程度で達した。検出面のレベルは標高15m前後である。

２．検出遺構

検出した遺構は、井戸（ＳＥ１）１基、自然流路（ＳＲ２）１条である。遺物は整理箱で15箱程出土したが、大半がＳＲ２の埋土中からの出土である。器種は土師器が大部分を占め、須恵器や山茶椀等も若干出土した。また、僅かながら弥生土器も出土している。

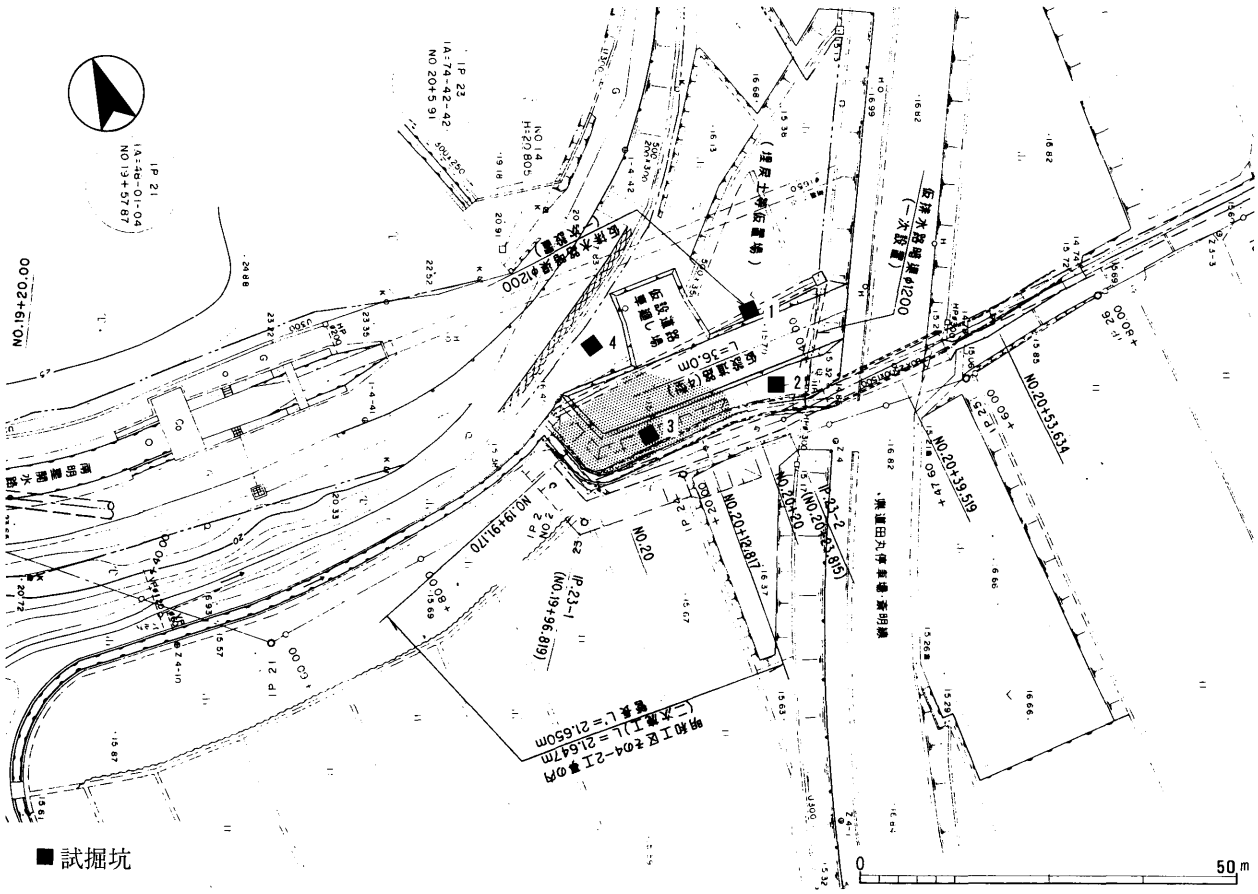
ＳＥ１　調査区の北壁に近接した部分に位置する。長径2.6ｍの不整円形を呈し、底部は方形となる。深さは最も深いところで、検出面から1.2ｍ程度ある。遺構の形状と湧水が顕著であることから、井戸と判断した。井壁の保護施設は認められなかったが、方形の底部には、腐朽や抜き取りにより遺存しなかったものの、井戸側が当初設置されていた可能性が高い。検出面のレベルではＳＲ２の埋土に覆われており、入り江状となったＳＲ２の一部と当初は判断して掘削したため、別遺構と認識した後に採取した



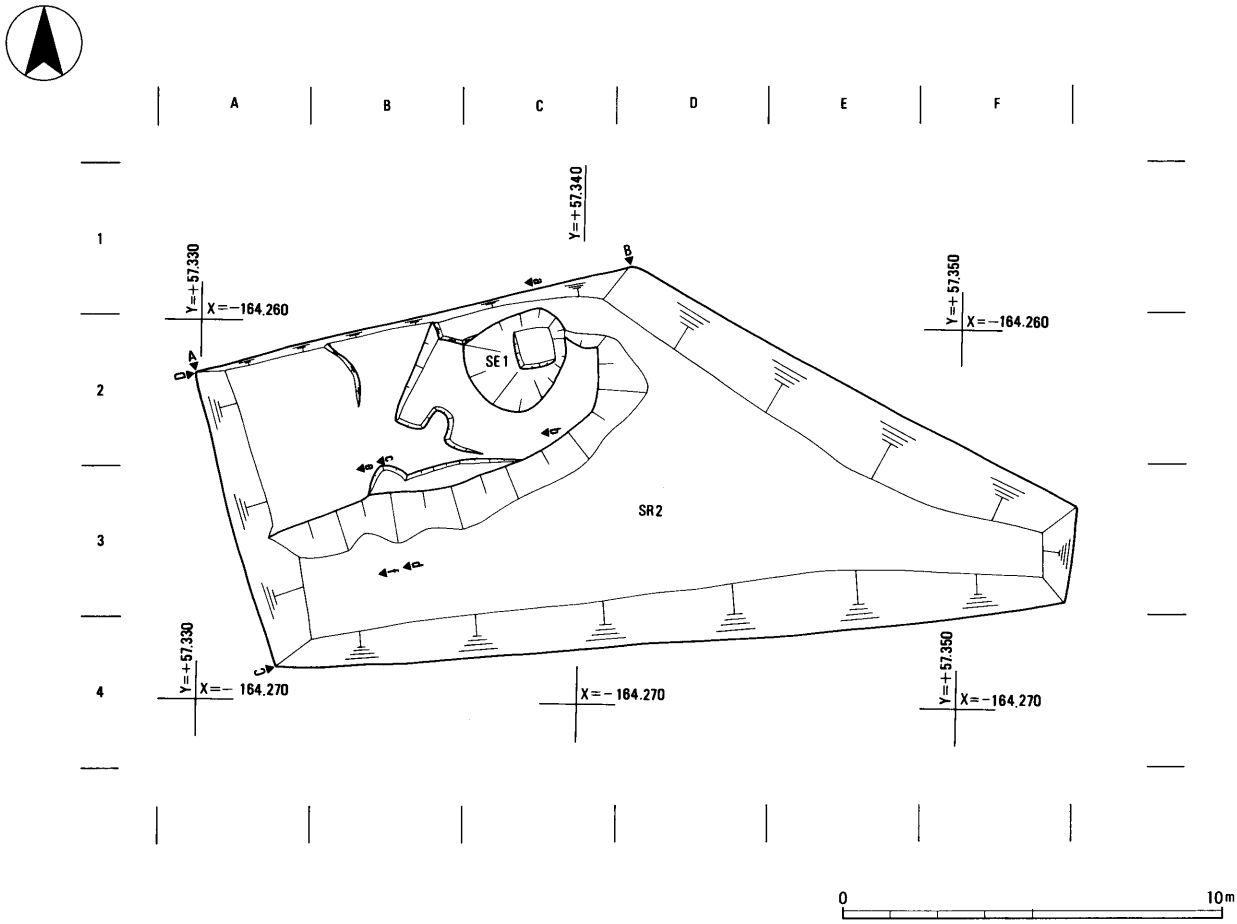
第３図　遺跡地形図（1：5,000）

遺物は僅かで、明確にＳＥ１出土遺物と言えるものは土師器の小片しか得られなかった。従って、遺構の時期は不詳ではあるが、層位的にはＳＲ２の埋没以前のものと考えられ、出土遺物中、唯一図化できた（１）は、古墳時代の土師器甕であるため、ＳＥ１は当該期まで溯る可能性がある。

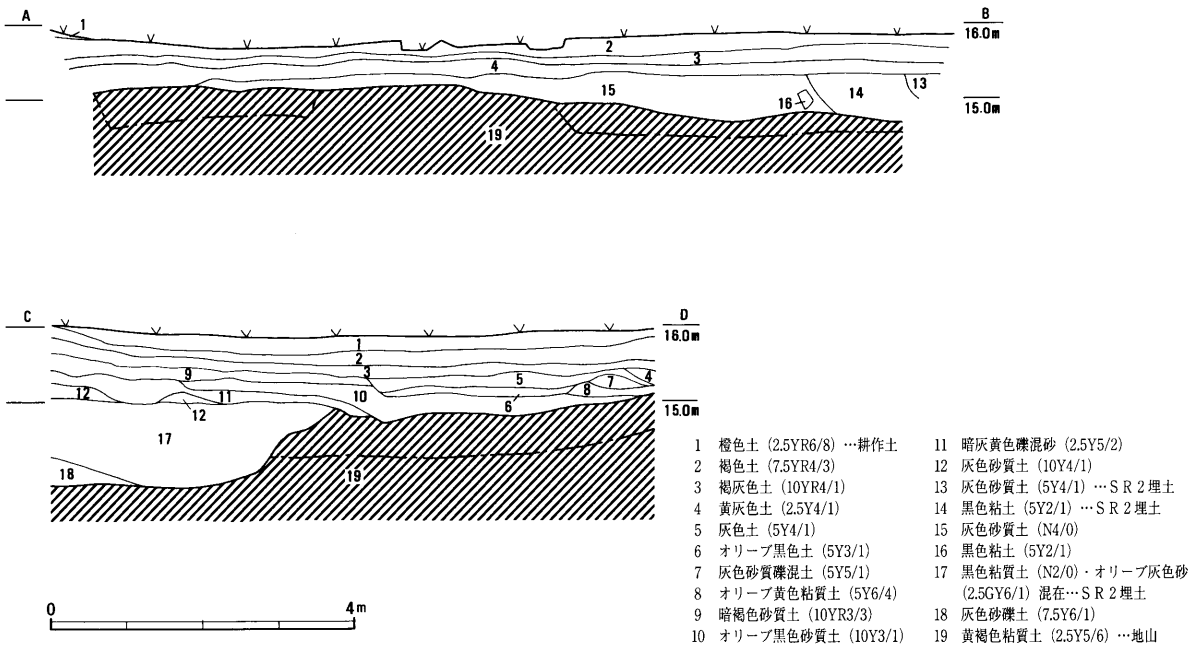
ＳＲ２　調査区の大部分を占めるＳＲ２は、深さが検出面から約１ｍある。埋土は、黒色粘土とオリーブ灰色砂が入り混じった互層であったため分層できず、１層扱いとした。埋土の上半部からは、弥生土器（２～12)、古墳～平安時代の土師器（13～71)、須恵器（72～75)、山茶椀（76・77)、土錘（78）など、多数の遺物が出土した一方で、埋土の下半部からの出土遺物は皆無に等しい。従って、ある程度流路が埋没した後に、遺物が混入したものと考えられる。ＳＲ２からは多数の遺物が出土したが、前述のとおり出土遺物は埋土の上半部に集中している。一方、面的な広がりについては、全体的に散在してはいるものの、流路の西半部に集中する傾向があり、部分的に密集した状況で出土したものもあった。また、出土遺物の大部分が奈良～平安時代にかけての土師器であり、前述の出土状況から、当該期に陸地から流路へ投棄された可能性がある。従って、ＳＲ２の存続期間は、今回の調査で得られた資料の範囲内で判断すれば、概ね奈良～平安時代となろう。



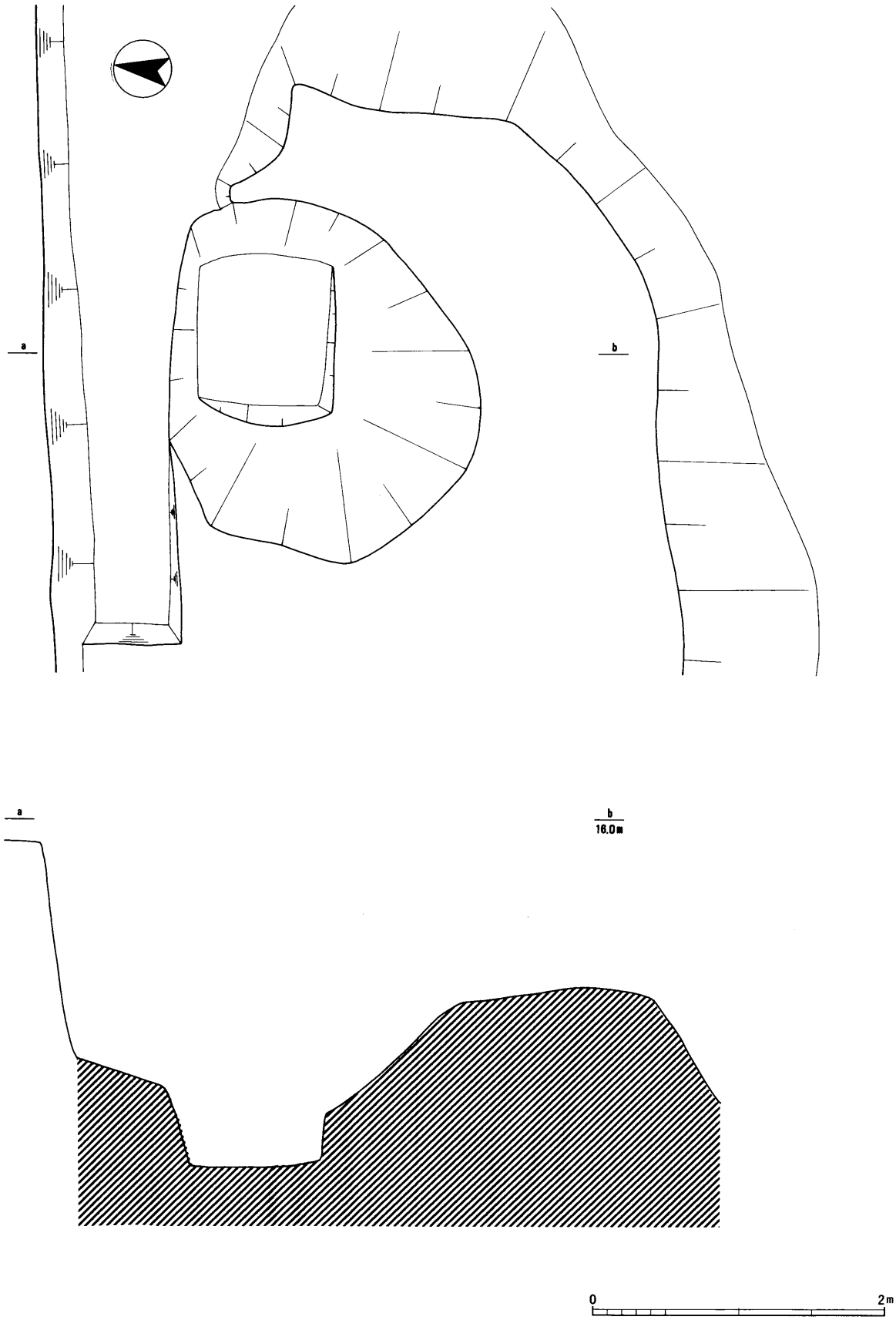
第４図　調査区位置図（1：1,000）



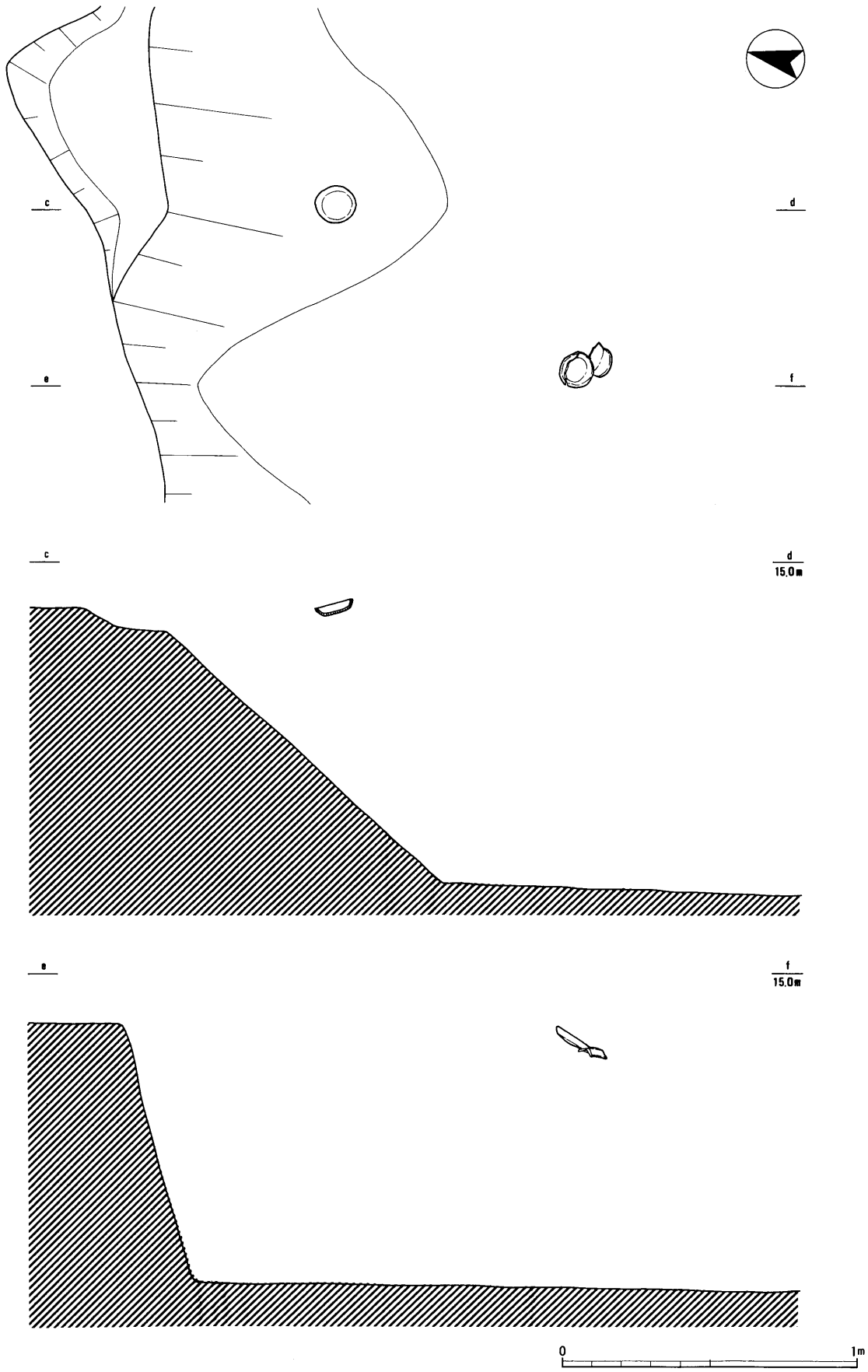
第５図　遺構平面図（1：200）



第６図　土層断面図（1：100）



第７図　ＳＥ１実測図（1：40）



第８図　ＳＲ２遺物出土状況図（1：20）

Ⅳ．遺　　物

今回の調査では整理箱15箱程の遺物が出土したが、大半がＳＲ２の埋土からの出土遺物である。器種は土師器が大半を占め、他に弥生土器や須恵器、山茶椀等も若干出土した。以下、掲載遺物について概要を記すが、個々の詳細は遺物観察表を参照されたい。

１．ＳＥ１出土遺物

図化できたのは（１）の１点のみである。口頸部のみの残存であるが、土師器台付甕と考えられる。口縁部には二単位のヨコナデ調整が施され、内外面共に稜が形成される。端部外面は折り返されヨコナデを受ける。体部外面には粗いハケメが施されるが、内面はナデ調整のみで、粘土紐の接合痕跡が観察できる。古墳時代中期～後期のものであろう。

２．ＳＲ２出土遺物

ＳＲ２からは多様な遺物が出土した。時期差の大きい遺物がまとまりなく混在した状況で出土しているため、報告は器種別に行う。

弥生土器　すべて中期の壺である。体部の（２）～（３）はヘラ描き沈線による施文、（４）～（６）は櫛描き横線文、（７）は櫛描き横線文に波状文が併用されたものである。底部の（８）～（12）は、いずれも残存度が低いが、(10)～(12)は（８）・（９）に比して体部の立ち上がりが緩やかで、底部径も大きいことから、胴部の張り出した比較的大型の器形と推定される。

土師器　(13)～(20)は椀である。(13)は内弯気味に立ち上がり、ヨコナデを受けた端部はやや外反する。外面は指オサエ・ナデのみの調整で、粘土紐の接合痕跡が残るのに対し、内面調整には工具を使用したとみられ、内面重視の調整姿勢が窺える。(14)～(16)は口縁部が緩やかに内弯し、体部が半球形となる。(14)・(16)の調整法は(13)と同様であるが、(15)は内外面共にナデ調整のみである。(16)は残存度が低いため口径や器形は推定であるが、注口が付与された希有の器種である。

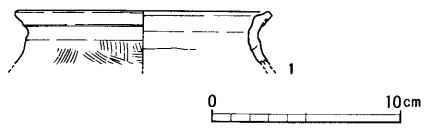
(17)～(20)は平底の椀である。いずれも口縁部の1/2以上をヨコナデし、端部が丸く収められる。調整は指オサエ・ナデのみで仕上げられる。

以上の椀の所属期は、概ね前者が飛鳥時代、後者が奈良時代と考えられる。

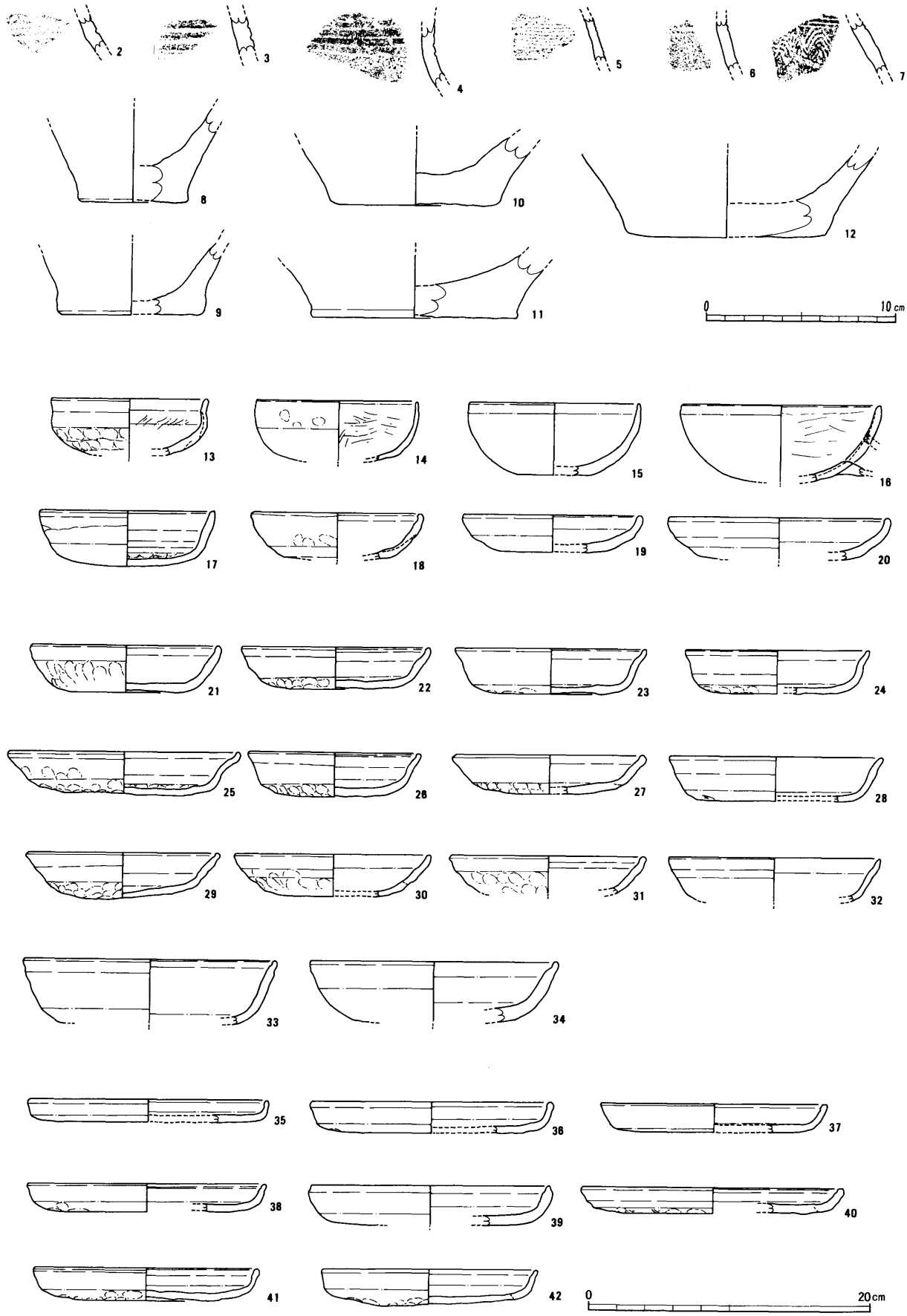
(21)～(34)は杯である。(21)・(22)は口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部を丸く収める。(22)は口縁部内面が若干肥厚し、稜を形成する。器面の調整は共にｅ手法である。[①] (23)～(26)は口縁部が外反気味に立ち上がり、端部はやや内弯する。器面の調整は全てｅ手法で、口縁部の2/3以上がヨコナデされる。(27)～(32)は口縁部がほとんど外反することなく直線的に立ち上がり、かつ外傾度が大きい。また、ヨコナデの範囲は、(27)～(29)が口縁部の2/3以上に施されるのに対して、(30)～(32)は1/2以下となり、後者はやや新しい要素を持つ。(33)・(34)は口径17cmを超える大型の杯である。器面の調整は共にｅ手法で、口縁部は直線的に立ち上がる。(34)は(33)に比して口縁部の外傾度が大きく、ヨコナデ範囲も狭いため、より新相を示している。以上の杯の所属期は、概ね平安時代初期～前Ⅱ期に収まるであろう。

(35)～(42)は皿である。器面の調整は全てｅ手法で、底部のヘラケズリは認められない。口径は15～19cm程度で、20cmを超える大型のものはない。器高は２cmに満たない浅底のもの(35)・(40)から、３cm近い深底のもの(39)までである。器形については、底部はいずれも平底で、口縁部がやや外反する(38)・(42)以外は、全て内弯する口縁部を持つ。これらの所属期は、奈良時代後期～平安時代前Ⅱ期に収まると思われる。

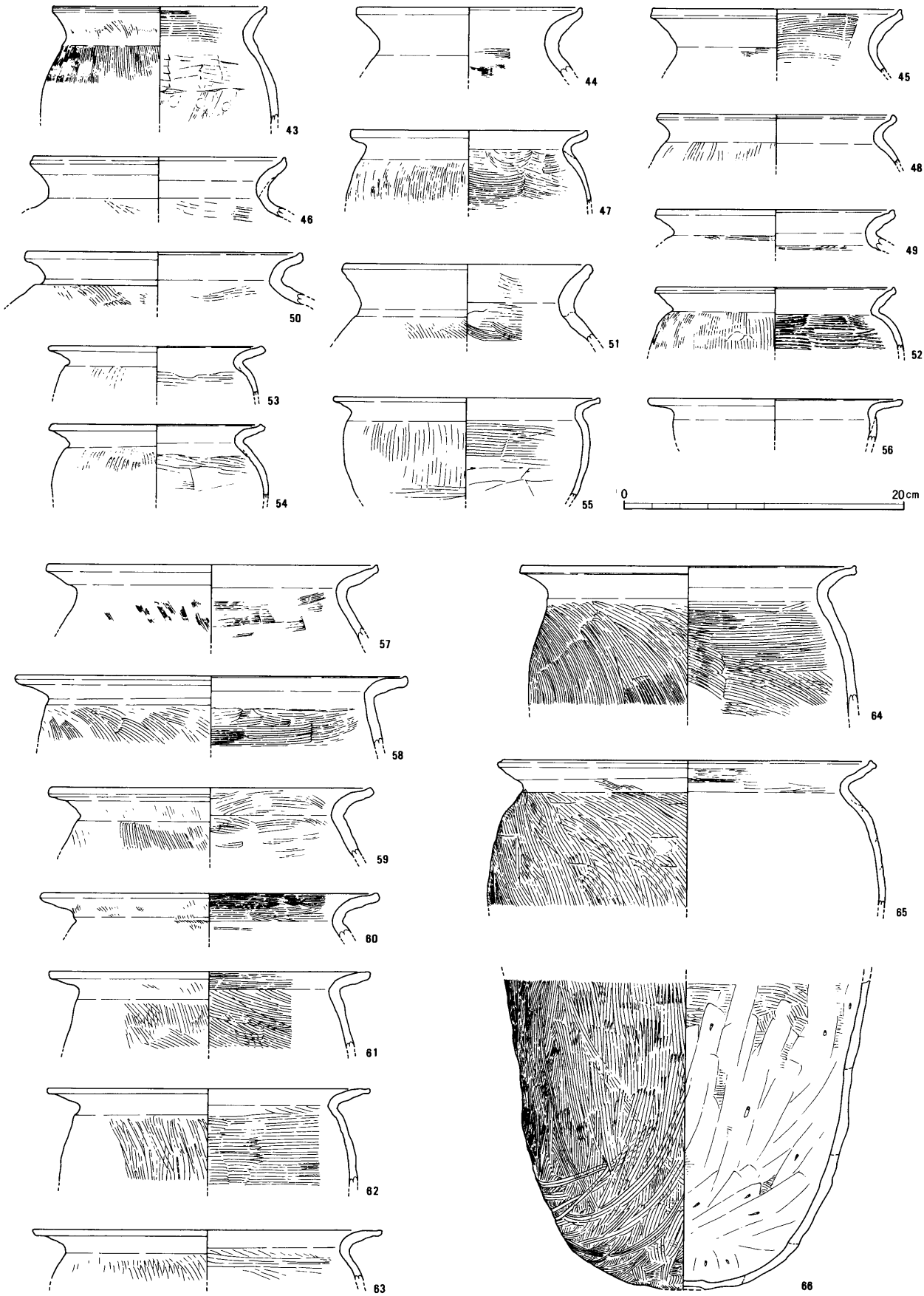
(43)～(54)はＡ類の甕と考えられる。[②] (43)～(48)は口縁部の内面が体部に比して肥厚し、端部の摘み上げも顕著で、外面に面を持つ。このような



第９図　ＳＥ１出土遺物実測図（1：4）



第10図　ＳＲ２出土遺物実測図（２～12＝１：３，13～42＝１：４）



第11図　ＳＲ２出土遺物実測図（1：4）

特徴から、これらの甕は飛鳥時代の所産と考えられる。(51) は口縁端部が丸く収められるが、口縁部内面の肥厚が認められるため、飛鳥期のものとも考えられる。(49)・(50)、(52) ～ (54) は頸部の屈曲が著しく、口縁端部の摘み上げも殆どなされていない。奈良時代後期～平安時代前期に所属するものとみられる。(52) ～ (54) は器形から鍋とも考えられるが、ここでは甕とした。

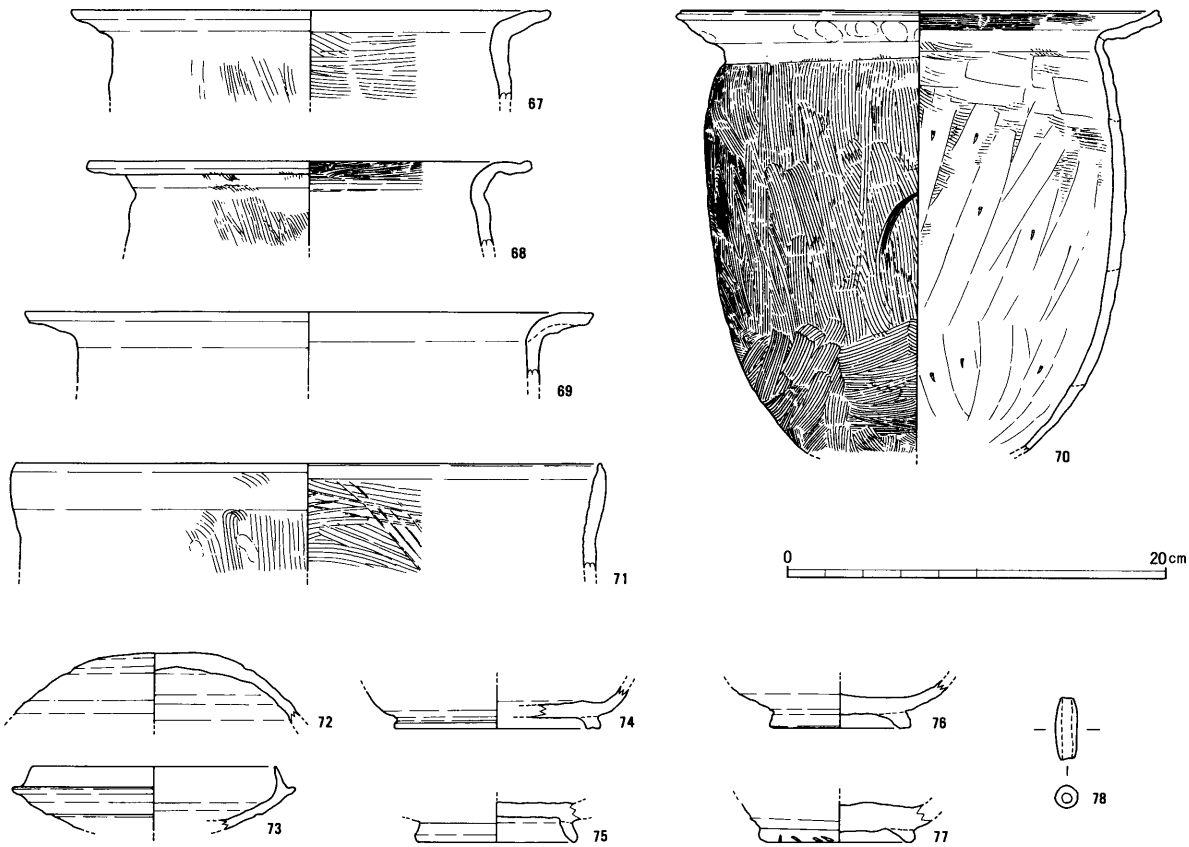
(55)・(56) は鍋である。両者とも体部最大径よりも口径の方が大きいＢ類であり、(55) は外面の調整からＢ１類と細分できる。(56) は口縁部が直角に屈曲し、水平に近くなる。

(57) ～ (70) は長胴甕である。(57) ～ (66) はＢ１類と考えられる。(67) ～ (70) は、(70) を除き残存度が低いものの、いずれも口径が体部最大径を上回ると推定できるため、Ｃ類としたい。

(71) は甑である。残存度が低く、口径は推定であるが、30㎝程度になるとみられる。口縁端部は摘み上げられている。Ａａ類と考えられる。

須恵器　蓋 (72) は天井部から口縁部にかけて緩やかな曲線を描き、口縁端部欠損のため断定できないものの、天井部外面の概ね1/2程度に、ロクロケズリが施されているものと考えられる。杯 (73) は口縁部の立ち上がりが短く内傾し、端部は丸く収められる。底部欠損のため断定できないが、外面のロクロケズリは底部の1/2以下になると考えられる。以上の特徴から、これらは共にⅡ－４型式に並行し③、６世紀後半頃のものと考えられる。杯 (74) は高台を伴う。底部のみの残存のため全体の器形は不明であるが、底端部に貼付された高台は接地面がほぼ平坦となる。Ⅳ－１型式並行で、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。(75) は椀である。底部のみの残存のため、口縁部形態など詳細は不明。比較的高い高台はハの字状に貼り付けられる。底部に糸切り痕跡は認められない。10世紀頃のものであろう。

山茶椀　(76)・(77) は底部のみの残存である。(76) は断面三角形状の高台がハの字状に付加され、自然釉が僅かに付着している。(77) は (76) に比して、



第12図　ＳＲ２出土遺物実測図（1：4）

高台の断面形態は類似するもののやや低く、底部の器壁は分厚くなる。また、底部内面には重ね焼きの痕跡が残り、高台には籾殻痕跡が認められる。(76)は渥美型第２型式新段階[④]、(77)は同第３－１型式で、12世紀末～13世紀前半と考えられる。

土錘　(78) は全長３cm余り、最大径１cm余りの小型で筒状を呈したものである。

３．包含層他の出土遺物

(79)・(80)は共に弥生土器壺である。(79) は口縁端部外面に刻みが入り、内面に貼付突帯を持つ。口縁部内面に貼付突帯が施される類例は少なく、管見の限りでは、コドノＢ遺跡（第３次調査）ＳＸ38出土の１例[⑤]と、金剛坂遺跡（第４次調査Ｅ８区周辺）包含層出土の１例[⑥]の計２例程度である。(79) は前期、(80) は中期の所産とみられる。

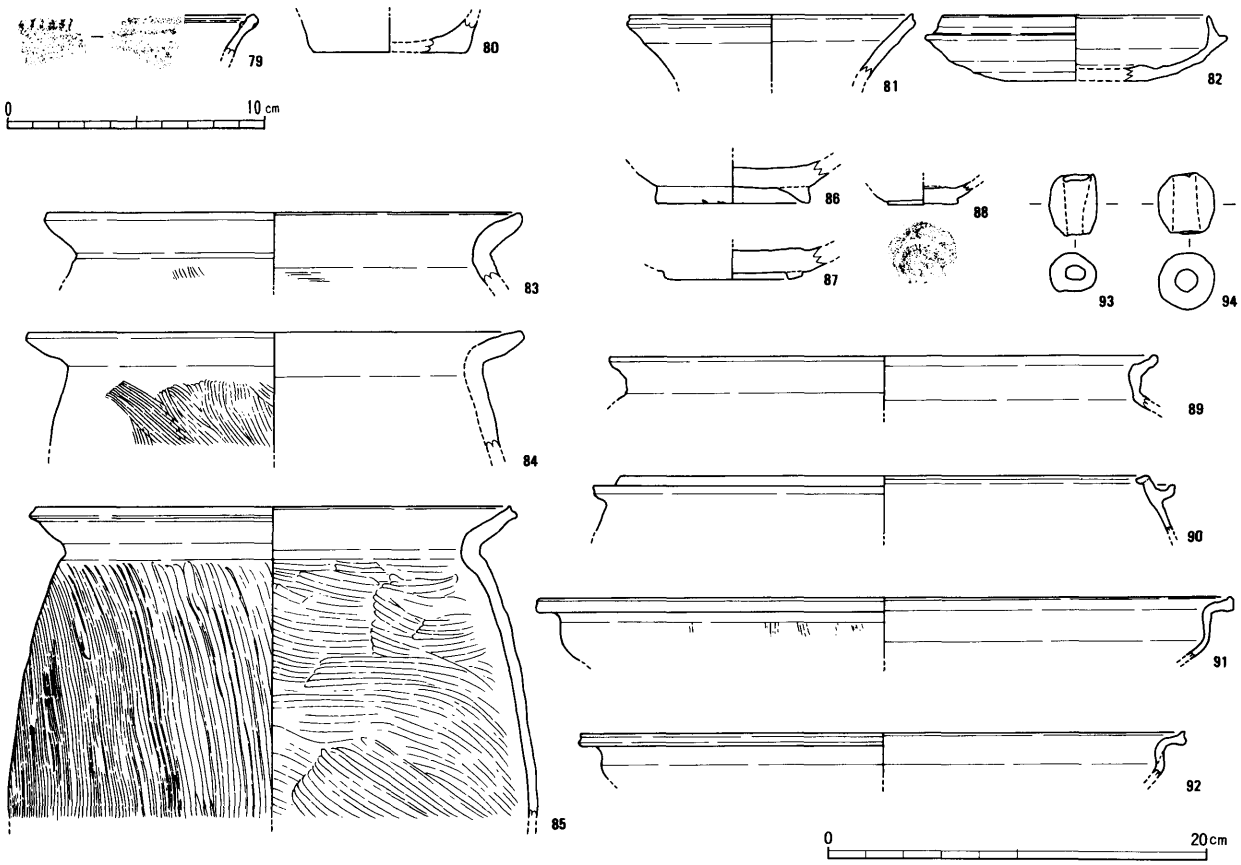
(81) は須恵器壺か。(82) は杯である。口縁部の立ち上がりが短く内傾し、端部は丸く収められる。外面のロクロケズリは底部の1/2程度に施される。Ⅱ－３型式並行で、６世紀後半頃のものとみられる。

(83) ～ (85) は土師器長胴甕である。(84) の内面は、剥離が激しく調整方法が不明であるが、これらはいずれもＢ１類と考えられる。

(86)・(87) は山茶椀、(88) は山皿で、全て底部のみの残存である。(86) は断面三角形状の高台が付加され、籾殻痕跡が残る。(87) は低い高台が粗雑に付加され、底部の器壁も厚い。(86) は渥美型第２型式新段階、(87) は同第３－１型式で、12世紀末～13世紀前半と考えられる。

(89) は土師器の鍋か。(90) は羽釜、(91)・(92) は焙烙である。これらはいずれも残存部僅少のため、口径は推定である。(90) は口縁部がやや内傾し、端部は方頭状に収められ、短い鍔が付加される。伊藤分類のＢ類短口縁短鍔系統とみられる[⑦]。(91)・(92) は共にナデ主体の調整が施され、器面の摩耗で不明瞭であるが、(91) の外面には僅かにハケメが認められる。また、両者とも外面に煤が付着している。江戸時代の遺物である[⑧]。

(93)・(94) は、団子状の土錘である。(93) は成形不良で、指圧により一部偏平化している。



第13図　包含層他出土遺物実測図（79・80＝１：３，81～94＝１：４）

番号	実測番号	器種	遺構	出土地区	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	003-08	土師器台付甕	SE1	2 C	13.2	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ (8本/1.5cm)	密 2mm以下の砂粒・赤色粒含	不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口頸部 1/6	・体部内面に粘土紐接合痕跡
2	004-04	弥生土器 壺	SR2	3 C	—	—	—	内:ナデ 外:ナデ後ヘラ描き沈線施文	密 1mm以下の砂粒含	並	内:にぶい黄橙 10YR 6/3 外:褐灰 10YR 4/1	体部 小片	
3	005-02	弥生土器 壺	SR2	2 D	—	—	—	内:ナデ 外:ナデ後ヘラ描き沈線施文	粗	やや不良	内:にぶい黄橙 10YR 7/2 外:灰黄褐 10YR 6/2	体部 小片	
4	004-03	弥生土器 壺	SR2	2 C	—	—	—	内:ナデ 外:ナデ後櫛描き横線文施文	並 3mm以下の砂粒多数含	良	にぶい黄褐 10YR 5/3	頸部 小片	
5	022-04	弥生土器 壺	SR2	3 C	—	—	—	内:剥離のため調整不明 外:櫛描き横線文施文	粗 2mm以下の砂粒含	並	内:灰 5Y 4/1 外:暗灰黄 2.5Y 5/2	体部 小片	
6	025-04	弥生土器 壺	SR2	試掘グリッド No 3	—	—	—	内:ナデ 外:ナデ後櫛描き横線文施文	粗 2mm以下の砂粒多数含	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	体部 小片	
7	004-02	弥生土器 壺	SR2	3 C	—	—	—	内:ナデ 外:ナデ後櫛描き横線文・波状文施文	粗 3mm以下の砂粒多数含	並	内:灰黄褐 10YR 5/2 外:灰黄褐 10YR 4/2	体部 小片	
8	022-07	弥生土器 壺	SR2	4 C	—	—	底部径 5.4	内:ナデ 外:ナデ	粗 3mm以下の砂粒多数含	並	内:淡黄 2.5Y 8/3 外:灰黄 2.5Y 6/2	底部 1/3	
9	023-05	弥生土器 壺	SR2	3 D	—	—	底部径 7.3	内:ナデ 外:ナデ	粗 3mm以下の砂粒多数含	並	灰黄 2.5Y 6/2	底部 1/3	
10	012-03	弥生土器 壺	SR2	3 B	—	—	底部径 8.0	内:ナデ 外:ナデ	粗 3mm以下の砂粒多数含	並	内:灰 N 5/0 外:黄灰 2.5Y 6/1	底部 1/4	
11	002-03	弥生土器 壺	SR2	3 C	—	—	底部径 10.8	内:ナデ 外:ナデ	粗 2mm以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	底部 1/6	
12	002-04	弥生土器 壺	SR2	4 C	—	—	底部径 10.6	内:ナデ 外:ナデ	粗 3mm以下の砂粒多数含	不良	内:灰黄褐 10YR 6/2 外:灰黄褐 10YR 5/2	底部 1/5	
13	011-05	土師器 椀	SR2	3 B	11.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ・工具ナデ? 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	やや密	良	灰白 10YR 8/1	1/4	・外面に粘土紐接合痕跡
14	002-02	土師器 椀	SR2	3 C	11.3	—	—	内:ナデ・工具ナデ?口縁端部ヨコナデ 外:口縁部上半ヨコナデ、下半指オサエ・ナデ	並	並	褐灰 10YR 5/1	口縁部 1/3	
15	025-01	土師器 椀	SR2	試掘グリッド No 3	12.0 (推定)	5.1	—	内:ナデ、口縁端部ヨコナデ 外:ナデ、口縁端部ヨコナデ	密	並	内:にぶい黄橙 10YR 7/4 外:淡黄 2.5Y 8/3	口縁部 1/12	
16	006-02	土師器 注口付椀	SR2	試掘グリッド No 2	14.0	—	—	内:工具ナデ?口縁端部ヨコナデ 外:工具ナデ?口縁端部ヨコナデ、注口貼付け後ナデ	やや密 1mm以下の砂粒含	並	内:明褐灰 7.5YR 7/2 外:明褐灰 7.5YR 7/1	1/3	
17	001-01	土師器 椀	SR2	3 B	12.2	4.0	—	内:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	並	良	灰黄 2.5Y 7/2	完存	・外面に粘土紐接合痕跡
18	003-07	土師器 椀	SR2	2 D	11.8	—	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並 1mm以下の砂粒含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部 1/4	・内面に煤付着
19	014-01	土師器 椀	SR2	2 C	12.5 (推定)	2.6	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	並	内:灰黄褐 10YR 6/2 外:灰白 2.5Y 8/2	口縁部 1/12	
20	014-03	土師器 椀	SR2	2 C	15.6 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	並	灰白 2.5Y 8/2	口縁部 1/10	
21	003-06	土師器 杯	SR2	2 C	13.2	3.4	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:指オサエ・ナデ、口縁端部ヨコナデ	並 4mm以下の砂粒含	不良	内:にぶい黄橙 10YR 7/2 ～黒褐 10YR 3/1 外:暗灰黄 2.5Y 5/2	口縁部 1/6	

第1表　出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土地区	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
22	001-03	土師器 杯	SR2	3 B	13.3	3.1	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並	良	灰白 2.5Y 8/2	ほぼ完存	
23	022-05	土師器 杯	SR2	3 C	13.4	3.3	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR 7/3 ～橙 7.5YR 7/6	1/2	
24	022-02	土師器 杯	SR2	3 C	12.8	3.2	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	密	並	にぶい黄 2.5Y 6/3	1/4	
25	003-01	土師器 杯	SR2	4 E	16.3	3.1	—	内:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並 2㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙 10YR 6/3	ほぼ完存	・全体に煤付着
26	001-02	土師器 杯	SR2	3 B	12.1	3.2	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並 0.5㎜以下の砂粒含	良	内:橙 5YR 7/6 ～褐灰 5YR 5/1 外:橙 5YR 6/8	ほぼ完存	
27	017-04	土師器 杯	SR2	2 D	13.3	2.8	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並 2㎜以下の砂粒含	良	灰黄 2.5Y 7/2 ～黄灰 2.5Y 6/1	口縁部 1/8	
28	014-05	土師器 杯	SR2	2 C	15.0	3.2	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	並	内:浅黄橙 10YR 8/3 ～橙 5YR 7/6 外:浅黄橙 10YR 8/3	口縁部 1/6	・外面に黒斑
29	003-03	土師器 杯	SR2	3 E	13.4	3.2	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並 微砂粒含	良	内:にぶい黄橙 10YR 6/3 外:にぶい黄橙 10YR 6/4 ～褐灰 10YR 4/1	口縁部 1/2	
30	017-06	土師器 杯	SR2	2 D	13.8	3.0	—	内:口縁部上半ヨコナデ、下半～底部ナデ 外:口縁部上半ヨコナデ、下半～底部指オサエ・ナデ	並 微砂粒含	不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/4	
31	017-05	土師器 杯	SR2	2 D	13.6	—	—	内:口縁部上半ヨコナデ、下半ナデ 外:口縁部上半ヨコナデ、下半指オサエ・ナデ	並 1㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/6	
32	014-06	土師器 杯	SR2	2 C	15.0	—	—	内:口縁部上半ヨコナデ、下半ナデ 外:口縁部上半ヨコナデ、下半ナデ ※焼成不良のため器面不明瞭	密	不良	浅黄橙 7.5YR 8/4	口縁部 1/6	
33	022-03	土師器 杯	SR2	3 C	17.7	—	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや密 1㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙 10YR 6/3 ～灰黄褐 10YR 5/2	口縁部 1/2	
34	013-02	土師器 杯	SR2	3 B	17.5	—	—	内:口縁部上半ヨコナデ、下半ナデ? 外:口縁部上半ヨコナデ、下半ナデ ※剥離のため調整不明瞭	やや粗 0.5㎜以下の砂粒含	並	内:灰白 2.5Y 8/1 外:褐灰 10YR 6/1	口縁部 1/5	
35	001-04	土師器 Ⅲ	SR2	3 B	17.0	1.6	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	並	良	内:橙 5YR 7/6 外:橙 2.5YR 7/6	口縁部 1/5	
36	014-02	土師器 Ⅲ	SR2	2 C	17.0	2.2	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	密	並	内:淡黄 2.5Y 8/3 ～灰黄褐 10YR 6/2 外:淡黄 2.5Y 8/3	口縁部 1/8	
37	011-03	土師器 Ⅲ	SR2	3 B	16.0	2.0	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	並 1㎜以下の砂粒含	やや不良	内:にぶい黄橙 10YR 7/2 外:にぶい橙 5YR 7/3	口縁部 1/8	
38	022-01	土師器 Ⅲ	SR2	3 C	16.7 (推定)	2.0	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	やや密 2㎜以下の砂粒含	良	黄褐 2.5Y 5/3	1/15	
39	014-04	土師器 Ⅲ	SR2	2 C	17.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	並	内:淡黄 2.5Y 8/3 外:淡黄 2.5Y 8/3 ～橙 5YR 7/6	口縁部 1/3	
40	001-06	土師器 Ⅲ	SR2	3 C	18.6	1.9	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並	やや不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/4	
41	001-05	土師器 Ⅲ	SR2	2 C	16.0	2.4	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並	良	にぶい黄橙 10YR 7/4	1/2	
42	003-02	土師器 Ⅲ	SR2	2 D	15.2	2.6	—	内:口縁部ヨコナデ、底部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、底部指オサエ・ナデ	並 1㎜以下の砂粒含	良	内:にぶい黄橙 10YR 6/4 外:にぶい橙 5YR 6/4	口縁部 3/4	

第2表　出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土地区	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
43	022-06	土師器 甕	SR2	3 C	15.2	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部工具ナデ、縦位のハケメ(6本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(7本/cm)	やや粗 1㎜以下の砂粒含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 6/3	口縁部1/3	・内外面に煤付着
44	023-01	土師器 甕	SR2	4 C	16.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(9本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや密	並	淡黄 2.5Y 8/3	口縁部1/8	
45	023-03	土師器 甕	SR2	3 D	17.9	—	—	内:口縁部～体部横位ハケメ(5本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ?	やや粗 2㎜以下の砂粒含	やや不良	浅黄 2.5Y 7/4 ～にぶい黄 2.5Y 6/3	口縁部1/5	
46	013-03	土師器 甕	SR2	4 B	18.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ ※調整不明瞭	並 0.5㎜以下の砂粒含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部1/6	
47	011-02	土師器 甕	SR2	3 B	17.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(9本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(7本/cm)	並 0.5㎜以下の砂粒含	良	内:灰白 10YR 8/1 外:灰黄褐 10YR 6/2	口縁部1/8	
48	023-04	土師器 甕	SR2	3 D	16.9	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(3本/cm)	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	淡黄 2.5Y 8/3	口縁部1/4	
49	011-01	土師器 甕	SR2	3 B	17.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	並 2㎜以下の砂粒含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部1/6	
50	013-01	土師器 甕	SR2	3 B	19.5	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ? 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ ※器面の摩耗激しく調整不明瞭	並 3㎜以下の砂粒含	やや不良	内:灰白 2.5Y 8/2 外:淡黄 2.5Y 8/3	口縁部1/4	
51	003-04	土師器 甕	SR2	2 D	17.6	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(7本/1.3cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(7本/1.3cm)	やや粗 2㎜以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙 10YR 6/4	口縁部1/6	・頸部内面に粘土紐接合痕跡
52	003-05	土師器 甕	SR2	2 D	17.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(5本/1.3cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(6本/1.3cm)	密 3㎜以下の砂粒含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部1/6	
53	017-03	土師器 甕	SR2	2 D	14.8	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(4本/1.3cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(4本/1.3cm) ※外面の摩滅激しい	並 2㎜以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部1/4	・54と同一個体の可能性あり
54	017-02	土師器 甕	SR2	2 D	14.8	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(4本/1.3cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(6本/1.3cm)	並 1.5㎜以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部1/5	・53と同一個体の可能性あり
55	015-03	土師器 鍋	SR2	2 C	19.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部上半横位ハケメ(6本/cm)、下半ヘラケズリ 外:口縁部ヨコナデ、体部上半縦位ハケメ(4本/cm)、下半横位ハケメ(6本/cm)	密	並	内:にぶい黄橙 10YR 7/3 外:淡黄 2.5Y 8/4	口縁部1/4	
56	012-02	土師器 鍋	SR2	3 B	18.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ? ※器面の摩耗激しく調整不明瞭	やや密 2㎜以下の砂粒含	良	灰白 10YR 8/1	口縁部1/10	
57	024-01	土師器長胴甕	SR2	試掘グリッドNo.3	23.4	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(5～7本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(18本/cm)	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	淡黄 2.5Y 8/3	口縁部1/6	
58	009-02	土師器長胴甕	SR2	3 B	28.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(7本/1.2cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(8本/1.2cm)	並 1㎜以下の砂粒含	やや不良	淡黄 2.5Y 8/3	口縁部1/8	
59	006-03	土師器長胴甕	SR2	試掘グリッドNo.3	23.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(5本/0.9cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(9本/1.1cm)	やや密 0.5㎜以下の砂粒含む	やや不良	灰白 10YR 8/1	口縁部1/4	
60	024-04	土師器長胴甕	SR2	試掘グリッドNo.3	24.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(7本/cm)	密 1㎜以下の砂粒含	並	内:淡黄 2.5Y 8/3 外:浅黄 2.5Y 7/3	口縁部1/4	
61	024-03	土師器長胴甕	SR2	試掘グリッドNo.3	23.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(6本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(6本/cm)	やや粗	並	淡黄 2.5Y 8/3	口縁部1/7	

第3表　出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土地区	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
62	015-01	土師器長胴甕	SR2	2 C	23.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(5本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(4本/cm)	密 1.5㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/10	
63	012-01	土師器長胴甕	SR2	3 B	25.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(6本/1.6cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(3本/0.8cm)	やや密 1㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部 1/10	
64	010-01	土師器長胴甕	SR2	3 B	24.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(8本/1.4cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(8本/1.4cm)	並 2㎜以下の砂粒含	良	内:にぶい黄褐 10YR 5/3 外:灰黄褐 10YR 5/2	口縁部 1/9	
65	017-01	土師器長胴甕	SR2	2 D	26.4	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(7本/2cm)	並 微砂粒含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/8	
66	007-01	土師器長胴甕	SR2	3 B	—	—	残存胴部最大径 26.2	内:横位ハケメ(7本/1.5cm)、縦位ヘラケズリ(2cm幅) 外:縦位ハケメ(7本/1.5cm)	並 3㎜以下の砂粒含	不良	内:にぶい黄橙 10YR 6/3 外:にぶい黄橙 10YR 6/3 ~黒 10YR 1.7/1	体部下半~底部ほぼ完存	・底部外面煤付着
67	015-02	土師器長胴甕	SR2	2 C	25.1	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部横位ハケメ(5本/cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(5本/cm)	密 1㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/8	
68	024-02	土師器長胴甕	SR2	試掘グリッドNo.3	—	—	—	内:口縁部横位ハケメ(6本/cm)後ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(7本/cm)	密 1㎜以下の砂粒含	並	淡黄 2.5Y 8/3	口縁部 1/7	
69	010-02	土師器長胴甕	SR2	3 B	30.0 (推定)	—	—	内:口縁部~体部ヨコナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並 2㎜以下の砂粒含	やや不良	灰黄褐 10YR 6/2	口縁部 1/12	
70	008-01	土師器長胴甕	SR2	3 B	25.0	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部上半横位ハケメ・板ナデ、下半縦位ヘラケズリ 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ(11本/2cm)	並 4㎜以下の砂粒含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 6/3	口縁部 1/4 体部 2/3	
71	016-01	土師器 甑	SR2	2 C	30.8 (推定)	—	—	内:横位ハケメ(3~5本/cm)、口縁端部ヨコナデ 外:縦位ハケメ(5本/cm)、口縁端部ヨコナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/16	
72	006-01	須恵器 蓋	SR2	試掘グリッドNo.2	—	—	—	内:ロクロナデ 外:口縁部ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	やや粗 2㎜以下の砂粒多数含	並	明青灰 10BG 7/1	天井部ほぼ完存	
73	023-02	須恵器 杯	SR2	3 C	13.0	—	—	内:ロクロナデ 外:口縁部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密 1㎜以下の砂粒含	良	灰 N 6/0	口縁部 1/6	
74	002-01	須恵器 杯	SR2	3 C	—	—	高台径 10.8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、高台貼付け後ヨコナデ	密	良	灰白 N 7/0	底部 1/6	
75	022-08	須恵器 椀	SR2	4 C	—	—	高台径 8.2	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、高台貼付け後ヨコナデ	やや密 1㎜以下の砂粒含	良	内:灰 N 5/0 ~灰白 N 7/0 外:灰 N 6/0	底部 1/5	
76	004-01	山茶椀	SR2	2 C	—	—	高台径 7.4	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、高台貼付け後ヨコナデ	密 2㎜以下の砂粒含	良	灰白 7.5Y 7/1	底部完存	・底部に糸切り痕跡 ・高台接地面及び高台内面に自然釉付着
77	011-04	山茶椀	SR2	3 B	—	—	高台径 7.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、高台貼付け後ヨコナデ	密 3㎜以下の砂粒含	良	灰白 N 8/0	底部ほぼ完存	・底部内面に重ね焼きの痕跡 ・高台に籾殻痕跡
78	023-06	土錘	SR2	2 E	最大径 1.2	全長 3.3	重量 4.34g	ナデ	やや密 1.5㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄褐 10YR 5/4 ~灰黄褐 10YR 5/2	ほぼ完存	
79	025-03	弥生土器 壺	—	調査区壁	—	—	—	内:ナデ、口縁端部突帯貼付け後ヨコナデ 外:ナデ、口縁端部キザミ	粗 1㎜以下の砂粒含	不良	内:灰黄褐 10YR 6/2 外:にぶい黄橙 10YR 6/3	口縁部小片	
80	025-02	弥生土器 壺	—	調査区壁	—	—	底部径 6.0	内:ナデ 外:ナデ	粗 1㎜以下の砂粒含 雲母多数含	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	底部 1/6	

第4表　出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土地区	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
81	019-02	須恵器 壺	包含層	3E 灰色砂質土層	15.0 (推定)	—	—	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	灰白 5Y 7/1	口縁部 1/5	
82	005-05	須恵器 杯	—	調査区壁	14.0	3.5	—	内:ロクロナデ 外:口縁部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	やや密 2㎜以下の砂粒含	良	内:灰白 N 7/0 外:灰白 N 8/0	1/5	
83	018-03	土師器長胴甕	包含層	3D 灰色砂質土層	25.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	並 0.5㎜以下の砂粒多数含	やや不良	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部 1/8	
84	018-04	土師器長胴甕	包含層	3D 灰色砂質土層	26.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部剥離激しく不明 外:口縁部ヨコナデ、体部縦位ハケメ (6本/cm)	粗 3㎜以下の砂粒含	並	灰黄褐 10YR 5/2	口縁部 1/6	
85	019-01	土師器長胴甕	包含層	3E 灰色砂質土層	25.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ (5～6本/1.8cm) 外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ (5～6本/1.8cm)	やや密 2㎜以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部 1/6	
86	020-03	山茶椀	包含層	4B 黒色粘土層	—	—	高台径 8.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、高台貼付け後ヨコナデ	並 0.5㎜以下の砂粒含	並	灰白 N 8/0	底部 1/3	・底部に糸切り痕跡 ・高台部に籾殻痕跡?
87	018-02	山茶椀	包含層	2D 灰色砂質土層	—	—	高台径 7.3	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、高台貼付け後ヨコナデ	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	灰 5Y 6/1	底部 2/3	・底部に糸切り痕跡
88	005-03	山皿	包含層	3E 灰色砂質土層	—	—	底部径 3.6	内:ロクロナデ 外:口縁部ロクロナデ、底部糸切り未調整	並 3㎜以下の砂粒含	良	灰白 N 8/0	底部 完存	・底部に糸切り痕跡 ・内面に自然釉付着
89	021-01	土師器 鍋	包含層	2D オリーブ褐色土層	29.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並 金雲母含	やや不良	内:灰白 2.5Y 8/2 外:浅黄橙 10YR 8/3	口縁部 1/4	
90	020-02	土師器 羽釜	包含層	3B 黒色粘土層	28.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並 1㎜以下の砂粒含	並	内:灰白 10YR 7/1 外:にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部 1/14	
91	005-01	土師器 焙烙	包含層	3C オリーブ褐色土層	36.6 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ・ハケメ ※摩耗のため調整不明瞭	並 極小の雲母含	並	内:にぶい黄橙 10YR 7/2 外:暗灰 N 3/0	口縁部 1/14	・外面全面に煤付着
92	018-01	土師器 焙烙	包含層	2C 灰色砂質土層	32.0 (推定)	—	—	内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並 1㎜以下の砂粒含	良	内:褐灰 10YR 4/1 外:暗灰 N 3/0	口縁部 1/14	・外面に煤付着
93	021-02	土錘	包含層	4D オリーブ褐色土層	最大径 2.5	全長 3.2	重量 14.11g	ナデ	並 金雲母含	並	浅黄橙 10YR 8/4	完存	・指圧痕跡あり
94	021-03	土錘	包含層	3E オリーブ褐色土層	最大径 3.0	全長 3.2	重量 22.97g	ナデ	並 金雲母含	並	にぶい黄橙 10YR 7/2	ほぼ完存	

第5表　出土遺物観察表

〔註〕

①「斎宮の土師器」『斎宮跡調査事務所年報』斎宮跡調査事務所 1984年（以下、土師器杯・皿については上記の文献に拠った。）

②上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮沸具の様相」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム　1996年（以下、土師器甕・長胴甕・鍋・甑については上記の文献に拠った。）

③中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会　1978年（以下、須恵器の編年は上記の文献に拠る。）

④藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号　三重県埋蔵文化財センター　1994年（以下、山茶椀の編年は上記の文献に拠る。）

⑤西出孝「Ⅳ．コドノB遺跡（第3次）調査」『コドノB遺跡（第2次・第3次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000年

⑥萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡（第4次）・辰ノ口古墳群（第2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年

⑦伊藤裕偉「楠ノ木遺跡出土羽釜形土器分類図」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告書－第3分冊－楠ノ木遺跡』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991年

⑧伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1　三重歴史文化研究会　1990年
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム　1996年

V. 結　　語

今回の調査は、遺物採取を主目的として開始したが、結果的には井戸と流路の一部を確認するに至り、また、比較的遺存状態の良好な土器採取ができたことで一定の成果は得られたと思われる。調査によって得られた資料は多くはないものの、検出遺構と出土遺物について若干の考察を行い、本報告の結語としたい。

当遺跡は、1972年（昭和47年）の幼稚園建設に伴う試掘調査において、土師器焼成坑及び掘立柱建物が検出されている[①]。一部の調査であることから遺跡の全容は不明であるが、土師器焼成坑の時期は８世紀代とされ、当該期に土師器生産が行われていたことは確実である。今回調査区は遺跡の南側縁辺部であり、周知の遺跡範囲よりもさらに南へ遺跡範囲が広がることが確認され、且つ、遺跡の南限がほぼ確定できたと言える。また、平安期の遺物が多数出土したことから、古墳～奈良時代とされていた遺跡の存続時期が、平安時代にまで降る可能性が高い。

遺跡範囲の南限を示すＳＲ２については、その全容は不明であるが、今回の調査に先立つ範囲確認調査で、線的な調査ではあるが、今回調査区の東側一帯にＳＲ２の埋土と同様の土層が堆積していることが確認されている。当該地の現況は、ほ場整備が行われた水田で、整備以前は沼田であったらしい[②]。以上のような状況から、当該地は人為が及ぶ以前は湿地帯であった可能性があり、報告では自然流路としたが、遺跡の南東部は沼沢地であった可能性も否めない。

次に、隣接の発シＢ遺跡との関連性について考えてみたい。両遺跡は、同一丘陵上の発シ古墳群の立地する尾根を介した東と南の縁辺部に隣接して位置し、存続時期も重なる。また、ともに８世紀代に土師器生産を行っていたことを示す土師器焼成坑が検出されるなど、同様の性格を持つ遺跡でもある。従って、これらの地を生活の拠点とした集団は極めて近い存在と考えられる。今回の調査では、時期不詳ながら井戸が１基検出されているが、隣接の発シＢ遺跡の第１次調査においても井戸が１基確認されている[③]。当該調査の報告書は未刊行のため、現地説明会時の簡易な資料からのデータであるが、井戸ＳＥ33は、直径３ｍ、深さ2.5ｍの規模を有し、方形の木組みの井戸枠を備え、井桁内径は1.2ｍを測る。土師器甕が多数出土し、時期は奈良時代後期～平安時代初期とされる。発シＡ遺跡ＳＥ１はこれに比して、やや小規模であるが同様の構造を呈しており、ＳＥ33の事例からも方形の木組みの井戸枠を設置していた可能性は高いと考えられる。今なお湧水が顕著であるにもかかわらず井戸枠が残存しなかったのは、腐朽というよりはむしろ抜き取られた可能性が強いものと思われる。

出土遺物に関して特筆すべきは、少量ながらＳＲ２及び包含層から出土した前期～中期の弥生土器が挙げられる。当遺跡周辺には、弥生時代の遺跡は今のところ確認されていないが、弥生土器の存在が、当該期の遺跡が付近に存在する可能性を示している。さらに、包含層出土の口縁端部内面に貼付突帯を持つ前期弥生土器壺については、前項でコドノＢ遺跡及び金剛坂遺跡において類例が認められることを提示したが、この他の類例は管見の限り見出せない。この施文方法は、当該期の普遍的な手法ではないことから、限られた地域での在地的な手法と考えられ、共に祓川右岸に立地し、当遺跡の西約2.5kmに位置するコドノＢ遺跡と、北西約２kmに位置する金剛坂遺跡、そして当遺跡周辺に生活の拠点を置いた集団の間には、密接な関係が存在したことを、この遺物が示していると言えよう。

〔註〕

①三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報３』 1972年

②地元住民の証言による。

③明和町教育委員会『発シＢ遺跡現地説明会資料』 1981年

図版 1

遺跡遠景（南から）

調査前風景（東から）

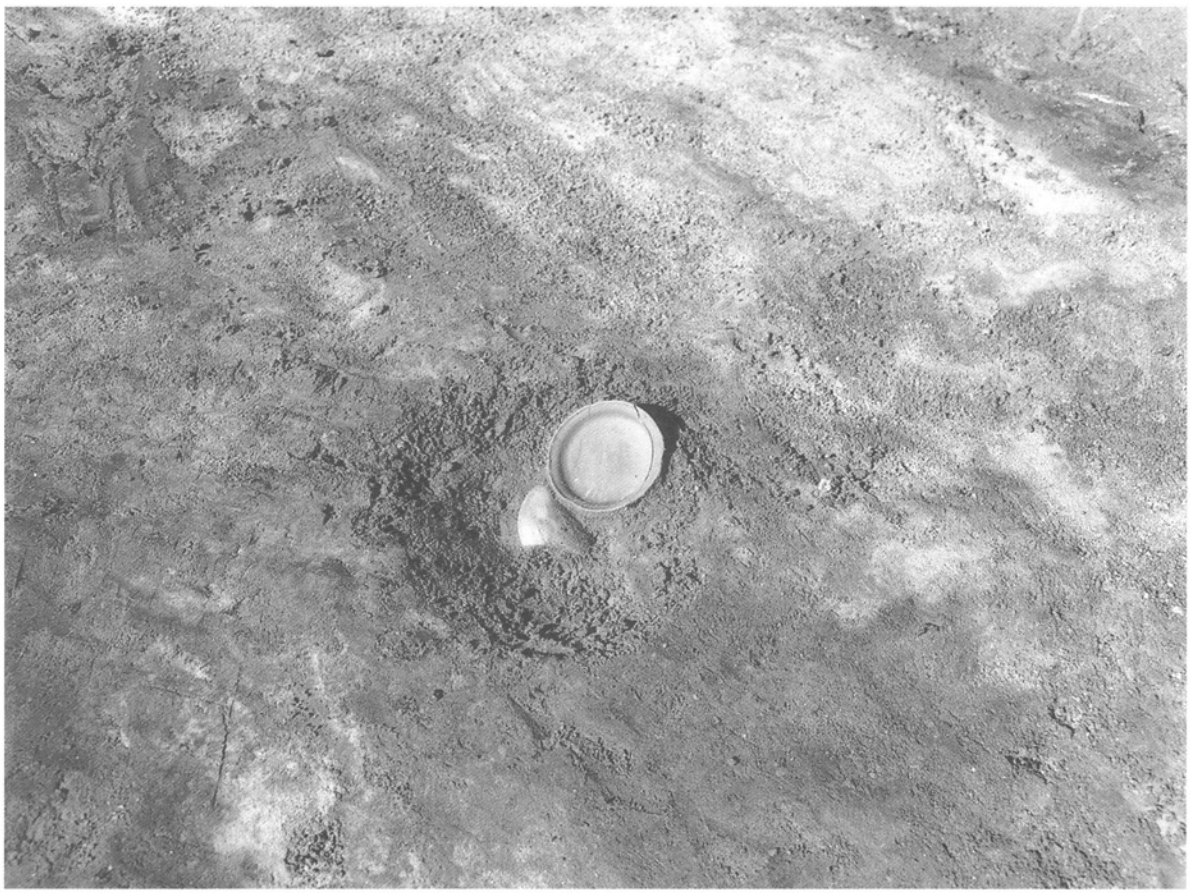
調査風景

ＳＲ２掘削作業風景

図版 3

ＳＲ２遺物出土状況（東から）

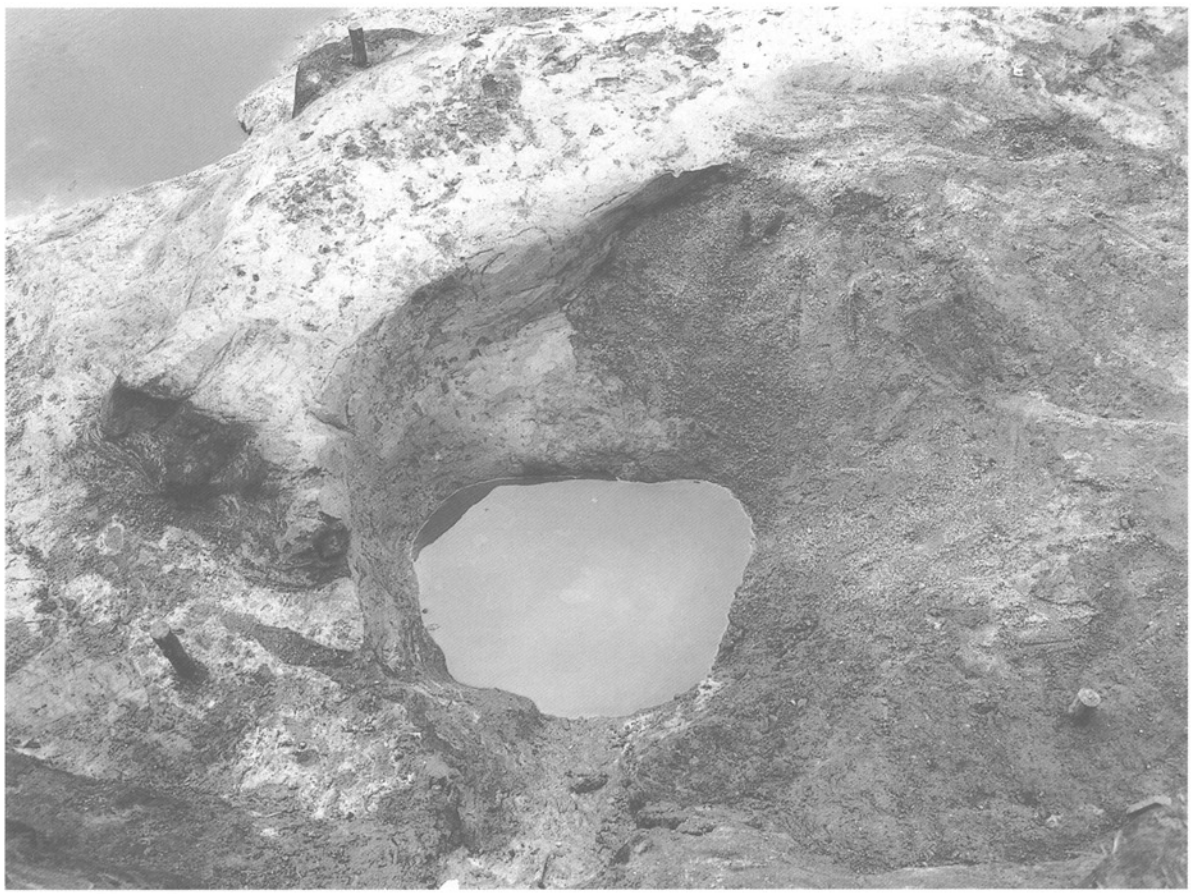
ＳＲ２遺物出土状況近景（東から）



ＳＲ２遺物出土状況近景（南東から）

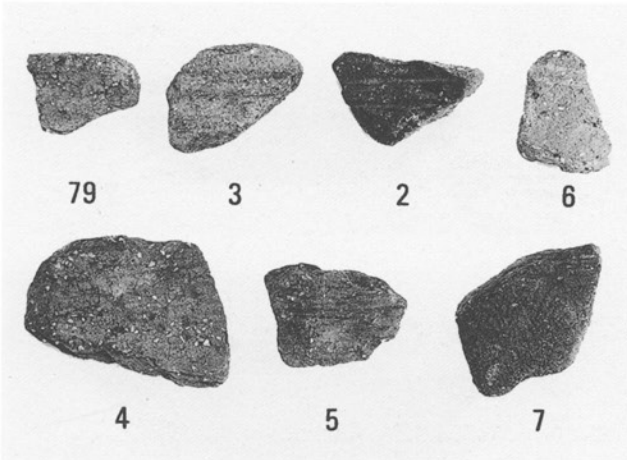
ＳＥ１（東から）

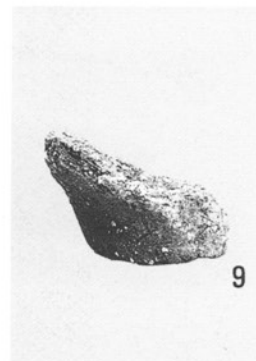
図版５

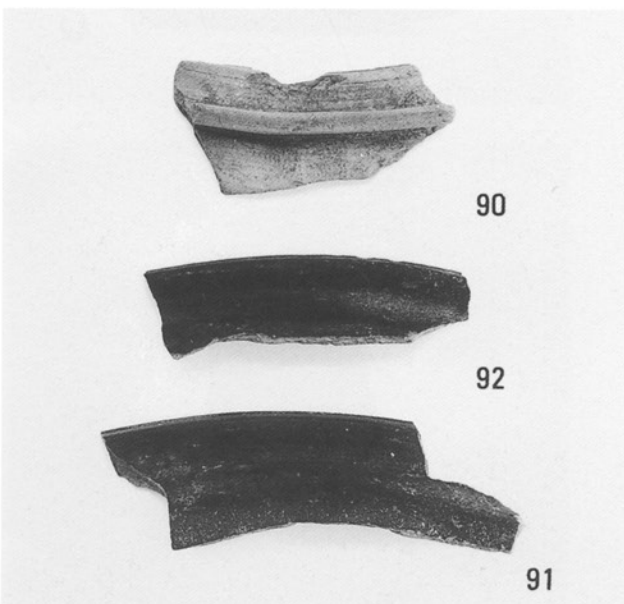


ＳＥ１（北から）

調査区全景（東から）







出土遺物（16＝1：3，他はすべて1：2）

図版 7

出土遺物（1：3）

出土遺物（1：3）

報告書抄録

ふりがな	おこしえぃいせき
書名	発シA遺跡
副書名	宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０８－３
編著者名	小山憲一
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦　２００２年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おこしえぃいせき 発シA遺跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちょううになか 明和町有爾中 あざおこし　たかだ 字発シ・高田	24442	213	34° 31′ 02″	136° 37′ 27″	20000928 ～20001027	250m²	国営宮川用 水第二期土 地改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
発シA遺跡	集落跡 生産遺跡	奈良時代 ～ 平安時代	井戸 自然流路	弥生土器 土師器 須恵器	

平成 14(2002) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 2 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　２０８－３

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

発 シ A 遺 跡

２００２年３月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　文化印刷有限会社